

「胆膵内視鏡消化管穿孔に対するOTSC縫縮術の経験」

埼玉医科大学国際医療センター

水出 雅文、良沢 昭銘、谷坂 優樹、原田 舞子、小川 智也、野口 達矢、鈴木 雅博

【緒言】胆膵内視鏡の進歩はめざましく、胆膵疾患の診療に多大な貢献をもたらしている。一方、日常診療では、出血や穿孔などの偶発症に遭遇する機会が存在する。遭遇する偶発症への対応が不十分となれば、重篤な病状への進行、不幸な転帰を招く可能性もありうる。安全かつ良質な胆膵内視鏡検査の遂行には、偶発症に対する理解と対応力が必要不可欠であり、偶発症症例を提示しつつ皆で議論・情報共有することは重要である。【目的】当院で経験した胆膵内視鏡関連の穿孔について検討すると共に、穿孔の対応について症例を提示し報告する。【方法】2014年1月～2019年2月の期間に施行された胆膵内視鏡検査3467回を対象とし、穿孔の頻度・穿孔を生じた処置・穿孔への対応・追加手術の有無について検討した。さらに消化管穿孔症例への対応を提示する。【症例提示】OTSC縫縮術を施行した消化管穿孔例を提示する【結果】穿孔は9例(内訳:乳頭処置関連2例, guide-wire操作による胆道穿孔1例,WONネクロセクトミー処置関連2例,内視鏡操作による消化管穿孔4例)。穿孔頻度0.26%。穿孔への対応としては、ENBD管理による保存的加療が基本となるが、内視鏡操作による消化管穿孔では3例に縫縮術(OTSC2例/クリップ1例)が追加されていた。全例追加手術は要せず保存的加療にて軽快した。【結語】胆膵内視鏡穿孔では早期発見に加え、適切な対応を行う事が重要である。従来、手術対応がなされていた内視鏡操作消化管穿孔に対するOTSC縫縮は手術回避が期待できる処置であり、今後更なる症例集積が期待される。一方で、当然のことながら、外科医と患者情報を共有し、手術移行へのタイミングを逸しないよう努めるべきである。